神に喜ばれる礼拝をささげよう　　**ローマ 12:1,2**

この連休は久々に旅行に出かける人が多いとニュースで言っていました。駅や空港は人でごった返していることでしょう。旅行は必ず目的地があります。誰に聞いても、「私はどこへ行くかわかりません。」という人はいません。目的地が分からなければ旅行とは言えません。それは放浪です。私たちの人生も旅のようなものです。「あなたの人生の目的地はどこでしょうか？」あるいは「人生の目標は何でしょうか？」と問われ、もしも人生の目的を持たないとすると、私たちは「人生の旅人」ではなく「人生の放浪者」や「人生の迷子」になってしまいます。ではどうやって人生の目的を見つけることができるのでしょうか。聖書は、「すべての人は神に造られた。」と教えています。神が造ってくださったわけですから神は、すべての人をご存知です。しかも神はすべての人を、愛を込め、目的をもって造ってくださっています。すべてのものは、存在する以上、目的なり計画があるのです。ですから、私たちは、自分で私の存在意義は何だろう？　私がいることに意味があるのだろうか？と一人で悩み苦しむのではなく、また無理して自分を大きく見せる必要もないのです。

主イエスはあるとき、「すべての命令の中でどれが一番大切ですか。」という質問を受けました。イエスはそれに対して、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」また「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」と答えられました。神への愛と人への愛を尽くして生きることが最も大切なことであると教えられたのです。しかも順序としては先ず神への愛があって、それに基づいて人への愛があるということです。ですから神への愛が最も重要なことなのです。

この神への愛を表わすのが礼拝です。礼拝とは愛する神のことばを聞き、神に祈ること、ひとことで言うなら愛する神と語り合うことです。愛する人のことばは何でも心の中にはいってきます。ですから神を愛すると言いながら、神を礼拝しないことは、ちょうど、奥さんがご主人に向かって、「あなたを愛していますよ。でも、あなたと口を聞きたくありません。顔も見たくありません。」と言うようなものです。愛するということは、相手に聞くことであり、相手に語りかけることです。神は、私たちに神を愛することを求めておられ、その神への愛を礼拝によって表わすことを期待しておられます。ですから「神を愛する者となる」ためにはまず礼拝にどのような思いで参加しているかが問われる必要があるのです。

そういうわけで今日は礼拝について聖書から考えてゆきます。

１）すべての人が礼拝に招かれている。

まず礼拝はクリスチャンのためだけのものではありません。すべての人が礼拝に招かれています。すべての人は神に造られ、神を礼拝する者として造られているからです。ですから礼拝に来られている未信者の方であっても遠慮なさらないでください。神様が招いていてくださっているのです。今日の聖書交読詩篇 148 篇には前半ですべて造られた者すべて主の名をほめたたえよと、そして後半に

「地の王たちよ。すべての国民よ。君主たちよ。地のすべてのさばきづかさよ。

若い男よ。若い女よ。年老いた者と幼い者よ。

彼らに主の名をほめたたえさせよ。」とあります。詩篇の最後（詩篇 150:6）には「息のあるものはみな、主をほめたたえよ。」ということばで終わっています。神によって造られたすべての人間は、造られた者として造り主である神を礼拝するよう招かれているのです。

2)応答としての礼拝

12:1 は、「そういうわけですから」という言葉で始まっていますが、「そういうわけ」とはどういうわけなのでしょう。これは、ローマ人への手紙の 1 章から 11 章に書かれているすべてのことを指しています。ローマ人への手紙は、1 章から 3 章は人間の罪について、4 章から 6 章は信仰について、7 章と 8 章は信仰者の苦悩と勝利、そして 9 章から 11 章ではユダヤ人に対する神の計画が論じられています。これらは一言で言うなら神が罪深い私たちのために何をしてくださったのかということが書かれています。

それから私たちの実際の生き方が出てくるのです。つまり私たちが、どう生きるべきかということは、私たち自身から出てくることではなく、神が私たちのためにすでに何をしてくださったかということから出てくることなのです。

旧約聖書　出エジプトに出てくる「十戒」は「倫理の中の倫理」と言ってもよいものですが、十戒もまた、神がどのようなお方であり、私たちのために何をしてくださったかに基づいて、私たちのなすべきことを教えています。十戒は、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」という戒めからではなく、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」（出エジプト記 20:2）という宣言から始まっています。

ローマ 12:1 の「そういうわけですから」というのは、このように、神がイエス・キリストによって私たちを罪から救い出してくださったことを指しているのです。もう少し具体的に言うなら、それは、神のあわれみを指しています。神が、私たちを救ってくださったのは、私たちに救われるに価するだけのものがあったからではありません。私たちは、みな罪人であり、神の前には、無力なもの、汚れたもの、惨めなものであったばかりか、神に対して逆らうものでもあったのです。そのような私たちが救われたのは、ただ、神のあわれみによってでした。私たちは、自分の罪のゆえに苦しんでいたのですから、それこそ自業自得なのですが、神はそのような私たちの苦しみをも、まるでそれがご自分の苦しみでもあるかのように、思いやってくださったのです。神の「あわれみ」は、単なる同情やかわいそうに思うこと以上のものです。それは、もっと、深く、高く、大きく、決して変わることのない愛です。

礼拝は、この神の救い、神がこの私を憐れんで下さったことへの応答なのです。それで、パウロは「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。」（ローマ 12:1）と言って、神のあわれみに対して応答しなさいと勧めているのです。クリスチャンの生活は、自分の欲望に支配される我が儘勝手な生き方でも、人の目を気にしながら生きる臆病な生活でもありません。また、それは、規則でがんじがらめに縛られた窮屈な生活でも、義務感に追い立てられ疲れ果ててしまう生活でもありません。礼拝とは、私たちが神に向かってささげるものですが、それは、私たちが「神を礼拝してあげる。」「神を賛美してあげる。」というものではないのです。礼拝は、私たちから始まるのではなく、神が私たちのために成し遂げてくださった救いのみわざから始まるのです。神の救いがあり、神のあわれみがあって、はじめて、私たちは、それに対する応答として神を礼拝することができるのです。神のあわれみに大胆に応答していく礼拝をささげていきましょう。

３）献身としての礼拝

ローマ 12:1 は、次に、礼拝とは「からだ」をささげることであると言っています。「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。」という表現は、旧約時代に、祭司たちが神殿で犠牲をささげて礼拝していた様子を思い起こさせます。旧約時代、ささげ物のない礼拝はありえませんでした。人々は、必ず、動物のささげものを携えてきました。穀物のささげ物もありましたが、穀物のささげ物にも動物のささげ物が伴いました。これは、私たちが、神に対して「物」ではなく「命」をささげなければならないということを教えています。それは神は、私たちの持っている何かではなく、私たち自身を、求めておられるということです。時間や健康、財産や才能などといった、私たちの持っている一部ではなく、私たちのすべて、私たち自身をささげることを神は求めておられるのです。「からだ」をささげるというと、手足を使ってする奉仕活動のことだと考えるかもしれませんが、聖書で使われている「からだ」という言葉には、そういう意味はなく、「全体」という意味があります。ですから、「あなたがたのからだを…ささげなさい。」というのは、私たちの身も心も、私たち自身を、私たちの人生のすべてをまるごと神にささげなさいという意味になります。その結果としての賛美があり、奉仕があり、献金

があるのです。

「からだをささげる」ということばは、また、私たちにキリストの十字架を思い起こさせます。どんな動物を捧げても、世界中のどんな価値あるものも、人類の罪の代価としては足らず、また、神に受け入れられる聖なるものではありませんでした。そこで、イエス・キリストは、ご自身をささげものとして、神にささげられたのです。イエス・キリストは、私たちを罪から救い出すために、あの十字架の上で、ご自分を犠牲の子羊として、神にささげられたのです。私たちは、キリストがご自身をささげられたことによって救われました。救いのわざを成し遂げてくださるのはキリストのみですがキリストの十字架の道は、ただキリストのためだけのものではなく、キリストに従う者も、キリストが歩まれたように十字架の道を歩むようにと教えています。キリストがそのからだを神にささげられたように、私たちもまた、そのからだを神にささげるよう求められているのです。そして、それこそが、私たちのなすべき礼拝であることを覚えたいと思います。新改訳聖書第三版で「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」とあるところは、新改訳 2017 では「それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」と訳されています。「霊的な」とは「理にかなった」という意味でも使われます。ここでは、キリストがそのからだをささげられたのなら、クリスチャンもキリストにならってそのからだをささげるのは、理にかなったこと、当然のことであるという意味になります。ですから「ふさわしい礼拝」と言えるのです。あなたは今日何を主に捧げようとしていますか？　自分自身を主に捧げる思いをもった多くの信仰者による礼拝は必ず祝福されないはずはありません。

４）礼拝とは自分が変わる時

２節に「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」とあります。ここでは、礼拝は、私たちの内面を変えるものであると教えられています。

「この世と調子を合わせてはいけません。」というところで使われている「調子を合わせる」という言葉と、「心の一新によって自分を変えなさい。」というところで使われている「変える」という言葉は、それぞれ、別の言葉が使われていますが、どちらにも「形づくる」という意味があります。そして、「調子を合わせる」という方は「外側から形づくる」、「心の一新によって自分を変えなさい。」というところでは、「内側から形づくる」という意味の違いがあります。この世は、私たちを外側から形づくろうとし、神は、私たちを内側から形づくるのです。その緊張関係の中を私たちは生きているのです。もし何も緊張関係にあることを感じないとするならどちらかに染まり切っているのかもしれません。

「心の一新によって自分を変えなさい。」とありますが、2017 では「心を新たにすることで自分を変えていただきなさい」となっています。これはどちらの訳もそれなりの意味を持っています。私たちの心をほんとうの意味で新しくしてくださるのは、聖霊です。自分の意志や努力で変われるほど私たちの心は素直ではありません。その意味で私たちは神に変えていただくのです。しかし、聖霊の働きを願い求める者の心の姿勢や態度というものがあります。それは私たちの悔い改めであり、信仰です。私を変えていただけるのでしたら神がおっしゃるどんなことでもします。従います、という私たちの意志と決断力、行動力も必要です。それが一つに合わさった時に大きな変化を見ることが出来るのではないでしょうか。神に教えられやすい人であるとなお良いと思います。最悪なのは私は何もしませんので寝てる間にでも変えておいてくださいというものです。礼拝が、神への真実な応答の時、献身の時であり、また私たちが神によって造りかえられる場であるようにと、心から願います。私たち、ひとりびとりが、この礼拝にただ来てここで一時間を過ごすだけというのでなく、本当に主を礼拝する者、真の礼拝者となることができるよう、祈ってゆきたいと思います。祈ります。